



大本山永平寺



立夏の頃

五月初旬から中旬の本山は、まさに息つく暇がないくらい慌ただしく過ぎていきます。まず一日に、新到掛搭式しんとうかたしきと言われる行持があります。これは、修行を志し今年の春に上山した者が、正式に永平寺の修行僧として認められ、更なる精進を誓うものです。この式を終えた者は皆、本当に本山の雲水の一人になれたと思う嬉しさの反面、今一度雪の降る山門の前に立ち、入山を乞いたあの時の気持ちに戻り修行につとめなくてはならないという自覚に、まさに身震いするような緊張を感じます。

また、六日には夏安居制中げあんこと呼ばれる、八月までの約一〇〇日間に及ぶ修行期間における配役が発表されます。特に、この期間の修行僧のリーダー役を拝命した首座しゅそは、掛搭式を済ませたばかりの者だけでなく、自分より安居年数の長い者に対しても指導助言と、常に心配りをしつつ先頭を切って、すべての修行につとめなくてはなりません。

その心構えと力量を披露するのが、十七日に行われる首座法戦式しゅそほっせんしきです。次々に繰り出される修行僧からの質問に対し、自己の持つ見識と強い決意を遺憾なく内外に發揮し、この夏季の修行が本格的に始まるのです。



大本山總持寺



夏安居

この春より道を求めて次々と上山してきた雲水が、正式に修行僧として認められる「新到掛搭式」と「首座入寺式」が今月二日に行われ、本山僧堂はいよいよ夏安居に入りました。

夏安居はお釈迦さまの時代に起源を発する行事で、元来「雨」という意味でした。この時期インドでは雨期になり托鉢などで心ならずも小さい虫を踏み殺すおそれがあるため、外出せずに一箇所（寺院などの精舎）に留まって坐禅修行を集中的に行いました。これが中国へ日本と相承され、現在も修行道場で厳格に行じられているのです。

夏安居の修行は七月十日までの三ヶ月間、約一〇〇日にわたって続けられ、特に今月十三日から十七日にかけては「五則」という行事が行われます。そのクライマックスが「首座法戦式」で、全修行僧の先頭に立つ「首座」という役の僧が江川禅師さまの命を受け、大勢の修行僧と禅問答を交わします。自らの持てる力をすべて出し切り、これに臨む首座と他の修行僧との、緊張感漂う真剣勝負が繰り広げられます。

以前の生活様式から修行の世界に飛び込み、戸惑いながらも必死に頑張ってきた新米修行僧たちも、五則が終わる頃には少しずつ本山の生活に馴染んでくるのを自覚するのです。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

薪の香の煙上がるや寒の月

愛媛県 能仁めぐみ

評 竈からの煙だろうか。昔は薪で煮炊き、それが普通のことだった。現在では薪を焚くストーブも少し贅沢な楽しみ方となっている。月光の歩に薪の燃える懐かしい香りに心が及ぶ。

三本の土づき大根ぶらさげて

京都府 荒木 健夫

評 親しい人へ訪問なのだろう。手土産に畑で引きたての葉付き大根を両の手に提げて。美味しさと気軽さと明るさがこの一句。リズムも良い。

◆料峭や柿落しの柝も待たで

東京都 伊奈 三郎

◆初めての事故にとまどひ夕時雨

静岡県 大塚てつ子

◆寒晴や紅きシューズの妻に躓き

愛媛県 井上 征郎

◆古民家の梁の曲りやつるしびな

神奈川県 大竹のり子

◆薄氷を踏めば幼き日の山河

愛知県 田中 澤子

◆大寒や坐禅の後の足解けず

和歌山県 田崎よし子

◆参道に鈴を切る音初大師

静岡県 望月かほる

◆散歩道踏むに戸惑ふ草若葉

愛知県 永井 幸子

◆春暁の月を背負うて万歩計

新潟県 星野 三興

◆聞法の一語洩らさじ白障子

秋田県 鈴木ゑい子

*選者吟

浅蜷搔き腰伸ばすとき全景を

五灰子

*作句小見

解き放たれたように草木がよろこび、色とりどりの花を咲かせる。

大自然の力に驚愕の季節。

一筋の水の流れも生き生きと感じられます。

土を踏んで歩くことが嬉しい。句帳を持って。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

亡き人の優しさ不意に憶い出す二月の空の
深き蒼さよ
兵庫県 待元 明子

評 青く澄んだ空を眺めていると、心が吸い込まれそうになることがある。人の心を理屈抜きに揺さぶる空の蒼さ。掲出歌では亡き人の優しさを憶い出す縁となり、胸を締め付けられる作者がいる。「不意に」がその昂りを伝える。

越後に降る雪一晚に背丈越す降ろすと言わ
ず掘ると言わせる
新潟県 星野 三興

評 この冬の積雪は記録的だった。雪国の人びとの毎日の雪降ろしの重労働をテレビなどの報道で観ては、その大変さに溜息が出たものである。「掘る」の一語の迫力に圧倒される。

- ◆父の手の意外に小さきを知りてより我の父似がまた一つ
増え
茨城県 太田 弘美
- ◆見透かされると知りつつ介護認定の調査に小さき嘘も
混じえる
兵庫県 前田あつ子

◆徴兵の馬を祀りし祠なく思しき辺りに「道の駅」建つ
秋田県 小田篤恭葉

◆震災に逆きし従兄の三回忌墓参の道に潮騒聞こゆ
宮城県 荒川 庄助

◆除染され木肌をさらす桃の樹が寒そうに立つ如月の畑
福島県 大槻 弘

◆感情に激する事も無くなりし八十路は妻と会話あるのみ
広島県 日松 弘

◆一塊の土持ち上げて名草の芽春のさ庭に出でて来たりぬ
東京都 長谷川 瞳

◆父が吹く江差追分の尺八の音色を今もテープにて聴く
北海道 吉田 洋子

◆海桐花焼く異臭と爆音鬼払い香る福豆孫らと語る
愛知県 小久保左門

◆さらさらと時の落ちゆく砂時計戻らぬ時がさらさらたま
る
福岡県 三吉 誠

*選者詠

たたまれて対の折難いできたり母病む部屋
にあした飾らん
ちづ

*作歌小見

東日本大震災から二年が経とうとしている。亡くなられた人たちの三回忌が近いというのにまだ仮設での生活を強いられている人も大勢いる。一日も早い復興をと祈るのみなの
がもどかしい。荒川さん、大槻さんの作品の前に頭が垂れた。